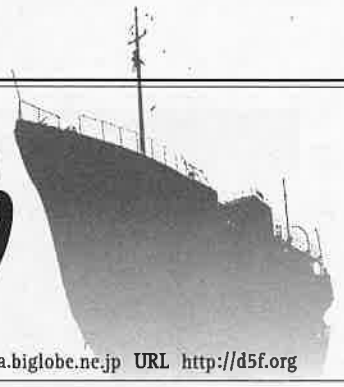


2005.10.01
No.323

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



9月23日久保山さんの命日に二二〇〇人が来館。写真左下は発行された「わたしとビキニ事件」手記集

秋の特別展「手紙 託された心」はじまる 長崎原爆資料館では『第五福竜丸展』

「久保山さん死なないで！
私はラジオや新聞を見ていま
したが、九月五日のニュース
で、久保山さんは夢からさめ
たように容態がだんだんよく
なり・・・私はこのままご回
復されることを祈っております。」
九月二三日から始まっ
た手紙展に展示された当時、
中学二年生からの手紙です。

暖かい心とともに平和を希求
する強い想いが感じ取れる手
紙一通一通をぜひこの機会に
ご覧ください。

長崎で第五福竜丸展

長崎市（原爆資料館）と第
五福竜丸平和協会の共催によ
る特別企画『第五福竜丸展』
が10月4日から12月25
日まで長崎原爆資料館にて開
かれます。

この企画は、被爆六〇年の
長崎で、原爆被害とその後
に繰り広げられた核兵器開発、
実験被害をとうして核兵器の
脅威、平和について考える
の趣旨からおこなわれるもの
で、広島平和記念資料館での
企画展（二月―六月）につづ
いて行われます。

久保山さんや家族に寄せる

手紙が船体に沿って展示さ
れ、とくに今回は四七都道府
県（沖縄も含め）から寄せら
れた手紙を一通づつ展示して
います。海外からの手紙も展
示しました。また特別出展と
して元乗組員鈴木鎮三さんの
妻静枝さんの手記（広島平和
記念資料館提供）などを読む
ことができます。

*久保山忌句会の特別船員賞作品（記事4めん）

石榴の実見すえて塚の鮭の眼

荒川 孚

モールス信号押せば愛吉歩がこだま

沖 正子

船員保険・遺族年金支給への道ひらく

大石又七

第五福竜丸の乗組員は、これまで半数の二三人（編注・乗組員二三人・被災時の平均年齢二五歳）が、ガンや肝機能障害という共通した病気で亡くなっています。大半が四〇代五〇代の働き盛りでした。

貧しい漁師は、働き手を失えば家族たちはすぐに路頭に迷います。一人ひとり見送りながらその家族を見つづけて



大学生に語る大石さん

きました。同じ境遇に立たされながら、自分はまだ生きています。何とかしてあげたい、思いは募るばかりでした。しかし政治決着という壁は厚く、どうすることもできません。

船員保険 再適用の道を探す

一九九八（平成一〇）年、乗組員だった小塚博さんは非常に重い肝臓障害（C型肝炎）を発病しました。これを期に船員保険の再適用を静岡県に申請しました。これは当然のこととして、漁船員だった時に、福竜丸の船上で作業中に受けた災害だったからです。

しかし県はこれを却下してきました。小塚さんは動けなくなり、寝たきりになってしまいました。望み薄だったのですが、最後の手立てとして、今度は私も参加し、厚生省の

中にある審査委員会に再提出しました。私も発病していません。

私はガンを発病しているし、最初の子どもは死産で奇形児でした。審査委員会にたいて、こうしたこともふくめて、被爆当日の様子から今日までの出来事を詳しく文章にして提出しました。私たちはマグロ漁を操業中、まぎれもなく大量の「死の灰」をかぶり被爆しています。発病もしているのです。この事実を無視することはできません。

C型肝炎の認定から 遺族年金へ

しかし、小塚さんに対して審査委員会は「治療中の輸血で感染したC型肝炎ウイルスから起こる内臓疾患のみを認める」という、理解に苦しむ認め方をしたのである。

事実であっても、やはり国が政治決着という重い決定をしているものまでくつがえすことは出来ないのかもしれない。

範囲の狭い小さな認め方だが、船員保険法で認めたい

うことは、これまで何もないところにならずかだが穴があいたわけです。この穴を手がかりにして、このたび私は苦しんでいるご遺族に対しての遺族年金の適用を引き出すことに成功しました。

そこに至るまでには、並々ならぬ知識と粘りが必要でした。内部からの圧力にも耐えながら、何回も静岡県にある社会保険事務局船員保険課に足を運び掛け合いを重ねました。

ビキニ事件は終わってはいない

成功の原動力となってくれたのが「マグロ塚の会」の及川佐さんと社会保険労務士の菊地修治さんです。ビキニ事件を熟知し、法律にも詳しい及川さんと、並外れた知識をもった菊地さんは、保険課の役人たちに保険法を指導しているように私には見えませんでした。専門職とはいえ、上には上がいるものです。

でも、ここにも壁がありました。亡くなった二二人の死亡診断書に「C型肝炎」とい

う字が書かれていない者はだめ、というのです。そのため、書かれている四人だけが認められたのです。そんな馬鹿な。C型肝炎ウイルスが見つかったのは一九八八（昭和六三年）です。見つかる前に亡くなった者の方が、重症で先に亡くなっているのです。書かれていないのが当然なのです。

もっとひどいのは、C型肝炎ウイルスが見つかった後、五人の仲間が死んでいるのです。分かっている、どうして治療してくれなかったのだ、どこまで俺たちを馬鹿にするのか、と言いたいです。

私達の発病は持病ではありません。加えられた病気です。法律は人を守るため、助けるためにあるのだと思います。ビキニ事件はまだ終わっていません。国はビキニ事件をもう一度調べなおすべきです。

（ビキニ被爆者・元第五福竜丸乗組員 第五福竜丸平和協会評議員）



高知県によるビキニ被災者の健診が実現

山下正寿



被災船員と遺族への聞き取りをする高校生たち（2004年・宿毛市）

高知県ビキニ水爆実験被災調査団と幡多高校生ゼミナールは、昨年のビキニ事件五〇周年に、再び室戸・室戸岬船籍の被災船の重点的調査をすすめました。それは福竜丸の東側で操業し、乗組員に爆発

の光や、降灰の記憶があり、船体・マグロ検査で汚染の記録がある船です。

結果は、乗組員の約半数がすでに死亡しており、四〇代（七〇代の、それも働き盛り）での死亡が判明し、特にガン発生率は通常の人よりかなり高率におよんでいました。

当時、船体に四〇〇〇カウント検知された第二幸成丸では、乗組員二〇人中一人が死亡していました。

私たちは、調査だけではだめだということと二〇〇五年二月に調査団を被災者支援もふくめて、「高知県太平洋核実験被災支援センター」に切り替えました。

県による乗組員の健診

一五年程前に、被災した元漁船員たちは「船員の会」を作りました。しかし、その後ほとんどの役員が亡くなり、自然壊滅してしまいました。改めて支援をすすめるため、「支援センター」に切り替え発足させたのです。今まで民医連の協力で四六名の健康診断をおこないましたが、初め

て県の主催での健康診断が実現しました。これは県の健康福祉部を中心にしてチームを組んで、高知県西部の幡多地域から受診希望者を出して、保健所が行うことになりました。

健診は、広島・長崎の被爆者と同じスタイルでやるけれどもビキニ事件を理解してもらわないとできないから、問診表一つ作るにしてもちゃんと学習してほしいということと「調査団」から講師を派遣し、県の職員と一緒に学習会をして、そして実施するとい

うところまでできました。学習会の準備中に、幡多地域の保健婦さんのサークル員一〇名が、「私たちはプロだから高校生にまかせてばかりではないけない」とビキニ問題の学習会を開いて、今後の協力を約束してくれました。

県主催の幡多地域の学習会も五月三〇日に開かれ、健康福祉部の方や、保健婦さんなど二〇数名が参加しました。

最初の健診は、主要な船に乗っていて取材などにも対応できる人にしぼり、四人の方が受診を希望しました。その

一人 井上さん（七二才）は、放射能検査によって最も大量のマグロを放棄した第五福福丸の乗組員で、事件後に体の筋肉が異常に痛みだし、一〇数年間も痛みがとれずノイロ一ゼ状態になった人でした。私たち調査団の取材では「今さら認知されたくない」と言われていましたが、幡多高校生ゼミナールに励まされ、ビキニ事件に関わったことを身内にもきちんと話した上で受診を希望されました。

新生丸の乗組員だった山下さん（七二才）は、同じ漁村から七人が乗船していました。その内六人がガン・心臓発作で死亡しており、本人も心臓近くの血管がつぶれ人工パイプを入れ胃の手術もしています。健康不安のため受診を希望されました。あとの二人は、一人が下痢がとまらずに、一人は家の事情でおいでになれませんでした。

太平洋の核被害者への支援の輪をひろげたい

六月九日に開かれた健診は、西部の保健所内で担当医

によって問診と血液・尿などが検査され、後日本人あてに通知がありました。検査は放射能症の専門医がいなく、より精密な検査が求められるという課題は残しながらも、不安をかかえたビキニ被災者の公的な健診ができたことには意義があります。

これを来年には高知市、室戸市と広げ、実現したいと思っています。費用については、残念ながら血液検査を委託していますので二二〇〇円は有料扱いです。それは募金などしながらカバーしていきたいと思っています。今私たちは、ようやく公的な支援が始まったの思いです。

ビキニ被害の究明には、元漁船員の実態をどうして証明せざるを得ない、これがスタートだと思っています。今後マーシャルの人々とかニュージールランドの被爆兵士の人たちを含めた太平洋での核実験の支援ネットワークをつくるために取り組んでいきたいと思えます。

（高知県太平洋核実験被災支援センター、幡多高校生ゼミナール顧問）

久保山さんの命日に さまざまな催し

秋のお彼岸の中日にあたる9月23日、久保山愛吉さんの命日に、今年もさまざまな催しがおこなわれました。この日はさわやかな秋晴れにめぐまれ、展示館には1200人を超える来館者があり、終日にぎわいました。

13回目を迎える「平和を語るつどい」は、戦争にまつわる紙芝居や一人語り、平和の歌などが披露されました。第五福竜丸ボランティアの会メンバーによる「久保山さんへの手紙」の朗読も披露されました。

第25回久保山忌句会は、20名が参加。午前中の吟行と久保山碑への献花では、平和協会の川崎昭一郎会長が挨拶、午後は会場を東陽町に移して句会が行われました。高点句の

二名には、平和協会の山村茂雄理事から特別船員賞と記念品が手渡されました。(1面掲載)

第19回「第五福竜丸のつどい」(約70名参加。東京原水協など主催)は、久保山碑に献花、元乗組員の大石又七さん、平和協会の藤田秀雄副会長が挨拶しました。学習会では、高知県におけるビキニ被災船についての講演がありました。

マグロ塚を作る会は、マグロ塚の前でビキニ被災等を語りながらマグロを味わいましょう、との呼びかけに約30人が参加。会員の近況報告や大石さんの話などがありました。

手記集「わたしとビキニ 事件」発行

ビキニ水爆実験被災50年記念事

業の一環として募集した手記が、このほど手記集『わたしとビキニ事件』として発行されました。

一昨年末より「福竜丸だより」、新聞紙上、公募雑誌等でよびかけ全国から応募があった50編余の「記憶の記録」から34編と特別掲載の6編をまとめたものです。

これまであまり語られてこなかった、生活に密着した事件と時代を垣間見ることができます。また多くの方が、50年前に思いを馳せながら「今」の平和についてメッセージを込めていることも大変印象的です。内容に即して9章に構成され、資料集として活用することもできます。ぜひ周りの方にお勧めください。A5判、64ページ 頒価500円(税込み・送料別)。

寄贈資料

入院病室の久保山さん、 乗組員の写真帖

入院中の久保山愛吉さんと焼津の妻すずさん、みや子さんを結んでの文化放送ラジオの生放送を担当した金澤大作さんから、放送時の久保山さんと病室の同僚、焼津魚市場の様子を撮影した写真資料のアルバムが寄贈されました。

病室での写真撮影は、カメラマンの藤川清さん(故人)です。

この時の放送の様様については、朝日新聞「声」欄に掲載された金澤さんの投書を福竜丸だより05年3月号に転載、また、このたび発行された「手記集・わたしとビキニ事件」にも収録され読むことができます。

寄贈されたアルバムには、金澤さんが手掛けられた街頭での録音番組「青空会議」の何回かの模様も収められており、第五福竜丸被災後の3月27日には、「原爆水爆をどう見るか」をテーマに大阪市立大の西脇安教授がゲストになっている街頭風景の写真も興味深いものです。

ロートブラット教授を偲ぶ

第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎

ラッセル＝アインシュタイン宣言発表の記者会見で議長を務め、その後長年にわたりパグウォッシュ会議で指導的役割を果たし、1995年に同会議とともにノーベル平和賞を受賞したジョセフ・ロートブラット教授が8月31日療養先のロンドンの病院で亡くなられた。

私は学生時代から、論文を通じてその名前は知っていたが、個人的に知り合ったのは、1977年夏に東京・広島・長崎で行われた「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」の機会である。シンポジウムの事務局長として、私は、国際保健機関から推薦されて国際調査団に加わったロートブラット教授と自然科学グループ報告書作成で協力した。

本年7月9日、ラッセル＝アインシュタイン宣言50周年に当たり第五福竜丸平和協会は記念講演会を行ったが、その際、参加者一同

の名でロートブラット教授宛に健康の回復を願うメッセージを送った。

これに対して7月18日付Eメールで下記の返信を受け取った。

Dear Shoichiro Kawasaki,
Thank you and the Daigo Fukuryu Maru Foundation very much indeed for your good wishes and the kind and interesting letter on the 50th Anniversary of the Russell-Einstein Manifesto. I am very pleased to hear about the lecture you organized.
Thank you once again for all your good wishes - as I cannot attend the Pugwash Conference this year I appreciate your message very much.
Best regards,
Joseph Rotblat

ロートブラット教授が核兵器禁止と平和のために注いだ知性と情熱を偲びつつ、心よりご冥福をお祈りする。

被曝島民への鎮魂歌

豊崎博光著「マーシャル諸島
核の世紀 1914～2004」を読んで

沢田 猛

十字路なのだという。ミクロネシアに浮かぶケシ粒ほどの同諸島で戦後、米国によって六七回の核実験が行われた。核実験による同諸島住民への被害補償を行っているNCT（核賠償請求査定委員会）の年次報告書によると、同諸島での核実験による合計爆発威力は約一〇八メガトンに達し、広島に投下された原爆の七二〇〇発分に相当するとい

う。この核の十字路に位置し、世界から忘れられ後遺症に苦しむ被曝島民に、豊崎さんが注目するようになったのは一九七八年。核被曝取材がきっかけだった。この「核」との出会いが、豊崎さんの目を世界各地の核被害に向かわせる原動力にもなった。

たたかう島の人に心寄せ
この本は、米国の文献や報告書をはじめ、さまざまな書や資料を涉猟、それらを駆使して文章構成されているが、現地取材を何度となく重ねて得た被曝島民の証言も、叙述の中で重要な位置を占めている。その中でぜひ挙げておかなければならないのはアンジャイン家の兄弟たちだろう。

（4面よりにつづく）
の五年間は、そこからスタートすることになります。こう考えれば、会議が破綻したために、五年前、一〇年前の核廃絶への約束が生きているのです。五年後の再検討会議に向けて、チャンスを作れたら、いつでも核廃絶を実現させるために行動するという気構えで、力を合わせていきましよう。

世界各地の核実験場や被災住民などを四半世紀以上にわたって追いかけてきたフォトジャーナリスト、豊崎博光さんが書き綴った『マーシャル諸島 核の世紀』が刊行された。執筆に三年余。四〇〇字詰めにして二三〇〇枚。上下巻合わせて厚さ九センチにもなる大著だ。今年の日本文学界の最高賞である芥川賞に輝いた作品でもある。

この核の十字路に位置し、世界から忘れられ後遺症に苦しむ被曝島民に、豊崎さんが注目するようになったのは一九七八年。核被曝取材がきっかけだった。この「核」との出会いが、豊崎さんの目を世界各地の核被害に向かわせる原動力にもなった。

たたかう島の人に心寄せ
この本は、米国の文献や報告書をはじめ、さまざまな書や資料を涉猟、それらを駆使して文章構成されているが、現地取材を何度となく重ねて得た被曝島民の証言も、叙述の中で重要な位置を占めている。その中でぜひ挙げておかなければならないのはアンジャイン家の兄弟たちだろう。

核被害の告発と鎮魂
米国の同諸島における放射能人体実験疑惑について、クリントン政権下に出された最終報告書の中で同諸島政府が最も注目したのがプロジェクト4-1の研究だったという。最終報告書では人体実験はなかったとしているが、豊崎さんは、同研究によって米国は後遺症に苦しむ被曝島民たちを治療もせず観察し続けた冷酷で無慈悲なもうひとつの人体実験だったと断じている。

（本稿は、編集部で整理し小沼さんに加筆いただいたものです。）
豊崎さんの今回の作品はそのことと深く関係しているように思える。分厚い本の底からはマーシャルでの核実験による犠牲者を悼む歌が聞こえてくるようでもある。そう、核の犠牲者に対する鎮魂歌だ。

核の十字路から世界へ
世界の被曝（曝）史全体を射程に入れて描きながら、なぜ、マーシャルなのか。軍事評論家、前田哲男さんの表現を借りれば、同諸島は核の

日本統治時代、同諸島は「南洋群島」と呼ばれた一つに数えられ、その後、日本軍の軍事拠点となった。核時代への序章として、日本軍が同諸島に関わっていた点は見逃ごせ

ビキニ水爆実験で被曝し、ロンゲラップ環礁の村長を長く務めたジョン・アンジャインさん（昨年七月、81歳で死去）と豊崎さんは二〇年以上にわたり親交を重ねてきた。アンジャインさんは被曝島民の代表者として、最後まで核を告発し続けながら黄泉の国へ旅立っていった。そのアンジャインさんの「声」が、叙述の底に通奏低音のように流れているとみるのは私だけだろうか。

「フォトジャーナリスト・豊崎博光」は一枚の写真も使わずにこの本を書き綴った。核の恐ろしさは目に見えない。

私にはいつしかこの本が犠牲となった被曝島民への鎮魂歌のように読めてきた。（さわただけし 毎日新聞記者）
*
『マーシャル諸島核の世紀』は日本図書センター刊。上下巻で価格二二、一八〇円。

世界の被曝（曝）史全体を射程に入れて描きながら、なぜ、マーシャルなのか。軍事評論家、前田哲男さんの表現を借りれば、同諸島は核の

日本統治時代、同諸島は「南洋群島」と呼ばれた一つに数えられ、その後、日本軍の軍事拠点となった。核時代への序章として、日本軍が同諸島に関わっていた点は見逃ごせ

ビキニ水爆実験で被曝し、ロンゲラップ環礁の村長を長く務めたジョン・アンジャインさん（昨年七月、81歳で死去）と豊崎さんは二〇年以上にわたり親交を重ねてきた。アンジャインさんは被曝島民の代表者として、最後まで核を告発し続けながら黄泉の国へ旅立っていった。そのアンジャインさんの「声」が、叙述の底に通奏低音のように流れているとみるのは私だけだろうか。

「フォトジャーナリスト・豊崎博光」は一枚の写真も使わずにこの本を書き綴った。核の恐ろしさは目に見えない。

私にはいつしかこの本が犠牲となった被曝島民への鎮魂歌のように読めてきた。（さわただけし 毎日新聞記者）
*
『マーシャル諸島核の世紀』は日本図書センター刊。上下巻で価格二二、一八〇円。

PIKADON 展に 500 通余の 来館者のメッセージ

7月16日から8月14日まで、黒田征太郎さんの作品によるPIKADON展が開催されました。第五福竜丸の甲板の上に大きな絵画8点、船の下に映像作品「忘れてはイケナイ物語」「ライブペインティング」「黒い雨」などが展示されました。

黒田さんが見学者のメッセージを寄せてくださいと描かれたカードには、さまざまな平和への想いを書きこまれ、展示館受付の横の壁一面に貼りだされています（1面に写真）。

ピカドン展の感想から

- 人間だから 生きる喜びを前にむけて 未来をつくっていきたいとピカドンプロジェクトを観て感じました。（8月9日）
- みんなが生まれてきてよかったとおもえるよのなかにしよう ばくだんいらぬ
- PIKADON展をヒロシマにいくまえにこれてよかったです。こことヒロシマとイラクといたみやかなしみも同じだけど、どこか祈りや人のあたたかさも同じでそれがうれしい、せつないです。ありがとう（Misa）
- みんながいつまでも平和でいられる。みんなの心が一つになれる。いつまでも一緒にいられる。
- 今日は最近知り合った女の子と2人で来ました。初めての待ち合わせで新木場は地味だと思ってましたが、来てよかった。PIKADON展の告知ポスターは図書館で見かけ、Yes Noにビビビときました。黒田さんの絵を見にきたのですが、原水爆について勉強できてホントによかったです。

一緒に来たコもそう思ってるのではないかと僕は思います。（25歳 学童クラブ指導員）

●明日は広島原爆記念日、第五福竜丸が水爆に犯されたことは知っていたが、夢の島に保存されていることは初めて知った。本当に核兵器のない平和を念願する次第である。

●山形県の家族4人で来ました。人の手によって命が奪われること 人と人とが信頼しあって生きていける世界こそ平和なのかなあ。ここに来てもっと多くの人が平和について考え直してほしいと思います。

●戦争体験はないけれど決して今後戦争はあってはならないと 当時の悲惨さから強く感じます。

●広島も長崎も沖縄もせみが元気にいっぱい鳴いていました

でもあの日、すべての鳴き声は地にしずんだのだろう

せみよいつまでも鳴き続けてほしい！

●黒田先生のお話を聞き戦争や原爆に興味を持ちました。今、世界中でおきてる戦争がおわり平和になったらいいのに…（19歳・男）

●あれから60年、15歳で被爆した。今年も8月6日、8時15分、二度と過ちを繰り返さないよう、この事を次世代に伝えて生きたい。世界全人類の平和を望む（千葉市・男）

夏休み工作教室に 30 人

PIKADON 展終了後の8月16日から28日まで、夏休み工作教室「牛乳パックで作る第五福竜丸」が開かれました。午前11時と午後2時からボランティア・スタッフの指導で毎日数人の子どもたちが、「自分だけの第五福竜丸」を作りました。



平和を語り行動する若者たち

7月22日、日米文化交流の招きで来日したアメリカ・ワシントンの高校生8人とボランティアの大学生5人が来館しました。一行は館学芸員の案内で熱心に見学した後、質疑応答、感想を述べあいました。

*

8月14日、第五福竜丸のエンジンへの今年初めての薬品塗布の作業がおこなわれました。作業に参加したのは、「平和のための埼玉の戦争展」のスタッフの若者たち。2002年以来、毎夏の薬品塗布作業に、展示館見学をかねてボランティアで参加。この日はピカドン展の展示に見入っていました。

本の紹介

チンチン電車と女学生

堀川恵子、小笠原信之 著

広島に原爆が落とされた時、市内の市電を運転していたのは十代の少女たちでした。彼女たちが通っていた「幻の女学校」を追い、被爆少女たちの戦後をたどるドキュメントです（日本評論社刊、A5判 252頁、価1400円＋税）。

※おことわり——今号は8・9月合併号としました。